

【大学向け】新CEFR対照表 (2026年4月版)

— 解説編 —

旺文社 教育情報センター 2026年4月8日

入試で英語外部検定(外検)を利用する際、大学は受験生の利便性に配慮して複数の外検を利用可能とする場合が多い。その外検スコアを横並びに比較検討するのに欠かせないのが「CEFR対照表」。旺文社 教育情報センターでは2024年から独自に「新CEFR対照表」を作成、今回2026年4月版として[最新版を再掲](#)する。文科省が2018年3月にCEFR対照表を発表してから時間が経ち、中には実施を終了する外検も出てきているので、大学は注意が必要だ。

●各外検の変更点、留意事項

昨年版からいくつかの外検で変更がある。本表の留意点とあわせて以下に記載する。

【英検®】

2025年度から「準2級プラス」がスタートしている。準2級レベルから取得級に応じて段階的に得点換算や加点している大学は、準2級プラスの優遇内容を忘れずに記載したい。

【TEAP CBT】(本表より削除)

TEAP CBTは2024年度で試験実施を終了した。スコアの有効期限も2026年3月末で切れているため、利用不可とする場合は入試要項から外す必要がある。なお、試験を終了したのはTEAP CBTのみ、紙で実施するTEAPは継続していることを付け加えておく。

【GTEC®】

昨年10月、GTEC CBTは2025年度で試験実施を終了すると発表した(2025年度の受験スコアは2028年3月末まで有効)。利用を続ける場合、スコア有効期間中は入試要項に残しておく必要がある。ちなみにこちらでも紙で実施されるGTEC検定版は継続される。

GTECは2023年度からCEFRレベルの境となるスコア(閾値スコア)を変更している。閾値が変更されてから時間が経っているが、変更前の閾値のまま利用していると思われる大学も散見される。意図して文科省のCEFR対照表のスコアを利用しているケースもあると思うが留意点としてあげておく。

【TOEFL iBT®】

2026年1月にTOEFL iBTは試験内容の改訂を行った。それにあわせてスコアの表示方

式を今までの「0～120」のスコアから「1.0～6.0（0.5刻み）」のバンドスコア方式に変更、CEFR A1～A2の測定も可能となった（B1下限のスコア閾値は42から44へ変更）。受験後に返却されるスコアレポートには、総合バンドスコアとそれに対応する従来スコアも参考値として併記されるため（2026年1月から2年間）、本表にも両方を記載している。

【TOEIC®】

TOEICは技能別スコアに対するCEFRのみ公表している、4技能合計スコアのCEFRは公表していない。そのため本表では便宜上、CEFRレベルに応じた各技能スコアを単純合計した数値を記載した。ただしそれだとL&Rの比重が大きい※1。そのため2018年の文科省版CEFR対照表では、S&Wのスコアを2.5倍する手法が取られていた。しかし最近の各大学の入試要項では単純合計も多く見られ※2、本表もそれに準じた。偏りの対策として合計とあわせてL&R、S&W別のスコアを掲載している大学もある※3。

※1.たとえば各技能のB1スコアは「L=275」「R=275」「S=120」「W=120」でL&Rの比重が大きい。

※2.現在も2.5倍している大学は多い。

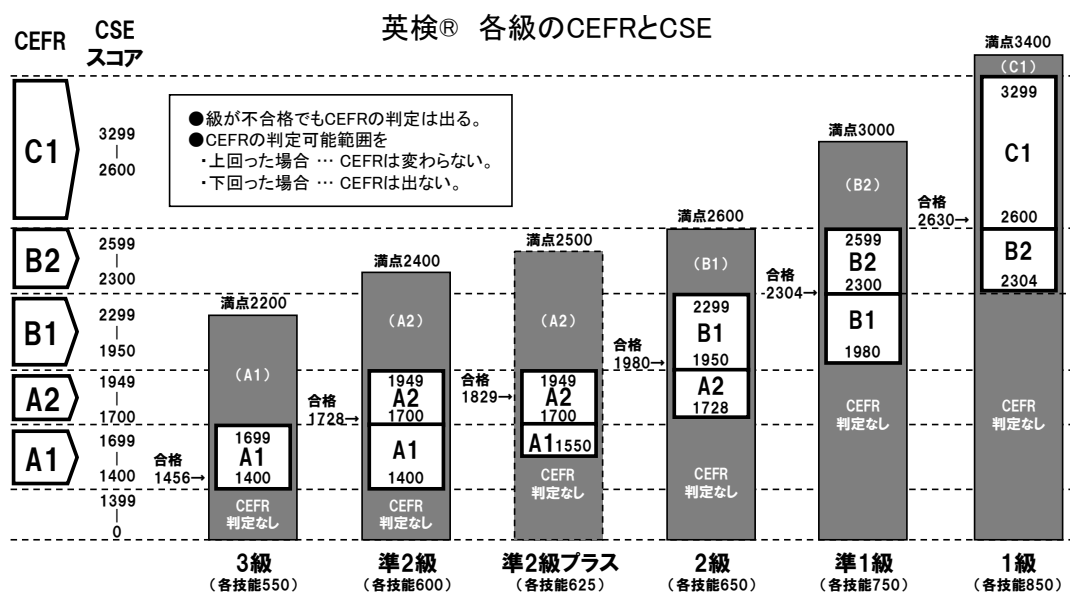
※3.例「出願資格=790(ただしL&R=550、S&W=240以上)」。

●英検®の注意点(入試要項での記載の仕方)

英検はほとんどの大学で利用でき、受験生も9割以上が利用している※。しかし各大学の入試要項を見ると、記載が不十分な大学が多い。ここではその注意点を見ていこう。

※2026年3月25日記事「外部検定利用入試 2026年は494大学！」参照。

その前にまず英検のCSEスコアとCEFRについて整理しておく。[新CEFR対照表](#)では各級の試験でCEFR判定が出る範囲だけ記載したが、0～満点の全体は次のようになる。



【例】前述を踏まえ、たとえばある大学の入試要項で以下のような記載があったとしよう。

出願資格

	実用英語 技能検定	TEAP	IELTS™	TOEIC® L&R/S&W	TOEFL iBT®	GTEC®	ケンブリッジ 英語検定
CEFR B1	2級、1980	225	4.0	790	42	930	140

この大学は出願資格が B1 で、相当する各外検スコアを一覧で示している。同じような大学は非常に多い。ちなみに「1980」は英検の CSE スコアを指す。【例】の大学は何が問題か。上図をもとに見ていこう。

【問題点①】「かつ」？「または」？

「2 級合格かつ 1980」なのか「2 級合格または 1980」なのかわからない。

2 級の合格ラインは 1980。つまり「かつ」の場合はわざわざ 1980 と書く必要がない※。そのため「または」の意味かと思われるが、正解はわからない。

なお「または」の場合は 2 級合格だけではなく、他の級でも 1980 を超えれば出願可ということになる（B1 が絶対条件の場合は 2 級か準 1 級の受験が必須、他の級では B1 判定がなされない）。

※実際には例外もある。英検S-CBTは4技能を1日で受けられるが、従来型と同様にRLWで1次、Sで2次、それぞれで合格判定がなされる仕組みになっている。仮にSが高得点で4技能合計では1980を超えたとしても、1次の合格基準を満たさずに不合格となるケースもありうる。ただしこのケースは頻繁にあるとは考え難く、そこまで入試要項で規定する必要はないと思われる。

【問題点②】「B1=2 級合格」ではない

「B1 のライン=1950」、「2 級の合格ライン=1980」でイコールではない。たとえば中間の 1960 だった場合、2 級は不合格だが CEFR は B1 の判定が出る。こうした受験生に出願資格があるのかがわからない。

【問題点③】準 1 級が不合格でも B1

準 1 級を受けた場合、不合格でも 1980 以上なら B1 の判定が出る。②と同様、この受験生に出願資格はあるのかが不明。

結局、【例】の大学は出願資格に「B1」「2 級」「1980」の 3 つの要素があり、それぞれイコールのようでイコールでなく、また、3 つのすべてを満たさなければいけないのか 1 つでもいいのかわからないため、受験生は混乱してしまう。

【改善案】

いっそのこと CEFR は入試要項から削除した方がスッキリする。

出願資格

実用英語 技能検定	TEAP	IELTS™	TOEIC® L&R/S&W	TOEFL iBT®	GTEC®	ケンブリッジ 英語検定
CSE 1980※	225	4.0	790	42	930	140

※2級以上の試験に限る

上記のように「CSE 1980」だけにすれば、受験級やその合格・不合格に関わりなく出願できることになり単純明快だ。逆に受験級を制限したい（たとえば下位級を受けて1980を取るのはナシ）のであれば表下に注釈を入れて受験級を指定すればよい。

ちなみに「CSE 1980」ではなく「2級」としてもよい。むしろ級で表記した方が受験生にはわかりやすい。ただし級合格を求めると「本当は相応の実力があるのに、もっと上の級にチャレンジして不合格だった受験生」を取りこぼすことになる。つまり「2級」と表記すると「(2級資格を持たずに) 準1級を受けて不合格だった受験生」は出願できないことになる。

(2026.04 後藤)